

清吉酔ふては檢束なくなり、砕けた源太が談話ぶり捌けたお吉が接待ぶりに何時しか遠慮も忘れ、擬されて辞まず受けては突と干し酒盞の数重ぬるまゝに、平常から可愛らしき紅ら顔を一層沢々と、実の熟つた丹波王母珠ほど紅うして、罪も無き高笑ひやら相手もなしの空示威、朋輩の誰の噂彼の噂、自己が仮声の何所其所で喝采を獲たる自慢、奪られぬ奪られるの云ひ争ひの末何棲の獅顔火鉢を盗り出さんとして朋友の仙の野郎が大失策を仕た話、五十間で地廻りを擲つた事など、縁に引かれ凶に乗つて其から其へと饒舌り散らす中、不図のつそりの噂に火が飛べば、とろりとなりし眼を急に見張つて、ぐにやりとして居し肩を聳だて、冷たうなつた飲みかけの酒を異しく唇まげながら吸ひ干し、一体あんな馬鹿野郎を親方の可愛がるといふが私には頭から解りませぬ、仕事といへば馬鹿丁寧で捗びは一向つきはせず、柱一本鳴居一ツで嘘をいへば匏を三度も礪ぐやうな緩慢な奴、何を一ツ頼んでも間に合つた例が無く、赤松の炉縁一ツに三日の手間を取るといふのは、多方あゝいふ手合だらうと仙が笑つたも無理は有りませぬ、それを親方が鼻眞にしたので一時は正直のところ、済みませんが私も金も仙も六も、あんまり親方の腹が大きすぎて其程でもないものを買ひ込み過ぎて居るでは無いか、念入りばかりで気に入るなら我等も是から羽目板にも仕上げ匏、のろりのろりと充分清めて碁盤肌にも削らうかと癖味を云つた事もありました、第一彼奴は交際知らずで女郎買一度一所にせず、好鬪鶏鍋つゝき合つた事も無い唐偏朴、何時か大師へ一同が行く時も、まあ親方の身辺について居るものを一人ばかり仲間はずれにするでも無いと私が親切に誘つてやつたに、我は貧乏で行かれないと云つた切りの挨拶は、なんと愛想も義理も知らな過ぎるではありませんか、銭が無ければ女房の一枚着を曲げ込んで交際は交際で立てるが朋友づく、それも解らない白痴の癖に段々親方の恩を被て、私や金と同じことに今では如何か一人立ち、然も憚りながら青沸垂らして弁当箱の持運び、木片を担いでひよるひよる帰る餓鬼の頃から親方の手について居た私や仙とは違つて奴は渡り者、次第を云へば私等より一倍深く親方を有難い忝ないと思つて居なけりやならぬ筈、親方、姉御、私は悲しくなつて来ました、私は若しもの事があれば親方や姉御のためと云や黒煙の煽りを食つても飛び込むぐらゐの了見は持つて居るに、畜生ツ、あゝ人情無い野郎め、のつそりめ、彼奴は火の中へは恩を脊負つても入りきるまい、碌な根性は有つて居まい、あゝ人情無い畜生めだ、と酔が図らず云ひ出せし不平の中に潜り込んで、めそめそめそ泣き出せば、お吉は夫の顔を見て、例の癖が出て来たかと困つた風情は仕ながらも自己の胸にもものつそりの憎さがあれば、幾分か清が言葉を道理と聞く傾きもあるべし。

源太は腹に戸締の無きほど愚魯ならざれば、猪口を擬しつけ高笑ひし、何を云ひ出した清吉、寝惚るな我の前だは、三の切を出しても初まらぬぞ、其手で女でも口説きやれ、随分ころりと来るであらう、汝が惚けた小蝶さまの御部屋では無い、アツハ、と戯言を云へば尚真面目に、木樵珠ほどの涙を払ふ其手をぺたりと刺身皿の中につつこみ、しやくり上げ戯言して泣き出し、あゝ情無い親方、私を酔漢あしらひは情無い、酔つては居ませぬ、小蝶なんぞは飲ませぬ、左様いへば彼奴の面が何所かのつそりに似て居るやうで口惜くて情無い、のつそりは憎い奴、親方の対を張つて大それた、五重の塔を生意気にも建てやうなんと憎い奴憎い奴、親方が和し過ぎるので増長した謀反人め、謀反人も明智のやうなは道理だと伯龍か講釈しましたが彼奴のやうなは大悪無道、親方は何日のつそりの頭を鉄扇で打ちました、何日蘭丸にのつそりの領地を与ると云ひました、私は今に若も彼奴が親方の言葉に甘へて名を列べて塔を建てれば打捨つては置かせぬ、擲き殺して狗に呉れます此様いふやうに擲き殺して、と明徳利の横面突然打ち飛ばせば、碎片は散つて皿小鉢跳り出すやちん鏘然。馬鹿野郎め、と親方に大喝されて其儘にくづりりと坐り沈静く居るかと思へば、散かりし還原海苔の上に額おしつけ既駢声なり。源太はこれに打笑ひ、愛嬌のある阿呆めに搔卷かけて遣れ、と云ひつゝ手酌にぐいと引かけて酒気を吹くこと良久しく、怒つて帰つて来はしたものゝ彼様では高が清吉同然、さて分別がまだ要るは。